

## ボクシングの歴史

ボクシング部 寺山正道（昭和 42 年卒）

古くは紀元前 3 千年頃の遺跡や出土品にボクシングの絵画や彫刻が発見されている。

未だ武器という物が無い時代に手足や身体で闘うボクシングが古代オリンピックの競技として加わったのは紀元前 688 年とされている。

中世の頃ボクシングは賞金のかかった見世物として、ベアナックル（素手）で時間も無制限で打ち合うスタイルであったが、1867 年に英国のクインズベリー侯爵の名を冠したクインズベリールールが基本ルールとして制定され、普及し始めたとされる。

そのルールは①グローブの着用 ②ラウンド制（1 分の休憩）③体重別 ④勝敗の決め方 の 4 つであった。

そして英国が近代ボクシング発祥の地とされ、ヨーロッパを中心に盛んとなったボクシングは 19 世紀から 20 世紀にかけて次第にアメリカが主流となる。

当時のアメリカの白人優位社会に於て、20 世紀初頭に黒人として初めてジャック・ジョンソンがプロボクシングヘビー級世界チャンピオンとなり、その後 1960 年のローマオリンピックで金メダルを獲得したモハメド・アリが、プロに転向し 1964 年に世界ヘビー級チャンピオンとなった。

モハメド・アリは黒人差別に反発し、ベトナム戦争での徴兵を拒否し、米国政府と長期にわたって争ったが、無罪を勝ち取った。1996 年のアトランタ五輪では聖火ランナーになる等国民的ヒーローとなり、黒人の地位向上に貢献した。

そして、21 世紀になり、アフリカ系混血バラク・オバマがアメリカ合衆国の大統領に就任した。

日本のボクシングの歴史としては、1906 年に渡辺勇次郎が渡米してサンフランシスコでボクシングを学び、1921 年に帰国してボクシングジムを創設したのが始まりとされる。

1928 年のアムステルダムオリンピックに選手を派遣する等普及は早かったが、五輪メダリストは 1961 年ローマ大会の田辺清の銅メダルが初めてであった。

以後 1964 年東京大会で桜井孝雄が金メダル、1968 年メキシコ大会で森岡栄治が銅メダル、そして 2012 年ロンドン大会で村田諒太の金メダル、清水聡の銅メダルと続いた。

一方、プロボクシングでは、1952 年に白井義男がアメリカのダド・マリノを破り日本人最初の世界チャンピオンとなった。当時、太平洋戦争の敗戦で疲弊していた日本人に勇気を与え、多くのボクシングファンを生んだ。昨今は多くの日本人の世界チャンピオンが生まれているが、21 世紀に入り女子ボクシングがロンドン五輪で正式競技扱いになり、又、小中学生対象の幼年ボクシングも 2012 年から全日本大会が開催される等、選手層は広がっている。

## 1. 関学ボクシング部の歴史

関西学院は1929年神戸原田の森から西宮市上ヶ原に移転したが、その翌年の1930年春に関学高商部2回生だった宮下正巳等によって、関学拳闘クラブとしてスタートした。

1932年に児玉国之進教授を顧問に迎え、1934年に準運動部から運動部に昇格し、正式に拳闘部として名乗ることとなった。

1933年に第一回関学・立教定期戦が関学講堂に於て開催され、終戦の翌年1946年には第一回関学・関大定期戦が西宮体育館で開かれている。

1947年に第一回全日本大学高専拳闘選手権大会関西大会（現在の関西学生ボクシングリーグ戦）が毎日新聞社の後援で開催され、関学ボクシング部が優勝を飾った。

2016年に第70回目を数えるこの大会は今も関西で学生ボクシングのメインイベントである。

1960年に第14回大会で前年に続き関西制覇した関学ボクシング部は、全日本大学王座決定戦に出場し、東の王者である中央大学を破り、念願の全国制覇を達成した。これは関西の大学としては初めて王座決定戦で関東勢に勝利した快挙であった。

関学ボクシング部で最高のプレーヤーを挙げるなら、1951年に短大商科に入学し、その年に全日本選手権大会のフェザー級チャンピオンとなった納谷誠二であろう。

彼は2年前の1949年（関学高等部ボクシング部に在籍中）、アマチュア東西対抗戦が高松宮殿下を迎えて甲子園球場特設リングで開催された時、当時の全日本選手権覇者（明大OB）を破り大金星を挙げて一躍脚光を浴びる勝利を取めた。

その後、請われてハワイ大学商科に編入し、ボクシングを続けたが、1954年、ベンシルヴァニア全米学生選手権大会で優勝し、更に翌年のアイダホ大会で2連覇を果たし、日系人として初めての全米最優秀選手となった。

この天才ボクサーは、ハワイ大学を卒業後、ハワイ大学経済学部教授となり、大学退職後は、1955年にハワイ州の観光局長に就任、観光を主要な産業とするハワイ州政府の中核となって活躍した。また関学の名誉博士号も持ち、まさに文武両道で関学全運動部員の誇りと言える存在です。

## 2. 私自身のクラブ経験

1963年夏、私は初めてボクシング部の道場を訪問し、入部の意思を伝え、部員となった。

高校時代は3年間野球部に在籍し、体力には自信があったが、格闘技は全く未経験で、最初の3ヶ月間は基本の習得に精一杯であった。

当時から関学ボクシング部は基本と先手連打を重視し、オーソドックスなスタンスと左ジャブからのワンツーストレートを徹底して指導された。

当時は3年前に全国制覇を果たし、毎年高校からの経験者も1~2名が推薦入学で関学ボクシング部に入ってきていて、レベルの高い陣容であったが、近畿大学がそれ以上にボクシングに力を入れて、全国から高校チャンピオンを集め、大学リーグ戦で関西制覇を続けていた。

夏に入部した1回生の私は、秋から翌年春までの間に何回かの非公式な試合に出してもらったが、経験者との違いは歴然として連敗が続いた。翌年の大学リーグ戦が秋に開催され、初戦は常勝近大とあたった。重量級の不足したチーム事情もあり、2回生になった私はライトウェルター級で出場することになった。相手は関東の中央高校で高校チャンピオンとなり、鳴り物入りで近大に推薦入学した染谷選手だった（後のプロボクシング日本ライト級チャンピオン）。試合が始まって1R 2分15秒、染谷選手の右ストレートのカウンターを顎に受け、意識を取り戻したのは自分のコーナーで手当てを受けた時だった。

この鮮烈な経験は、以後の試合で私に不思議な力を与えた。練習もそれまで以上に緊張感を持って取り組み、又、ロードワークで走り込んで足腰も鍛え上げて試合に臨んだが、以後の対戦相手は染谷選手のような空を切る時の迫力ある唸るパンチを持つ相手はいなかったからだろうか。リーグ戦の次の相手から3連勝し、翌年のリーグ戦も全勝でリーグ敢闘賞を頂いた。

4回生となり大学からボクシングを始めた選手としては当時では珍しく主将の任務を与えられた。ところが、この年の大学の教室で試験中にボクシング部員による不正問題が起り、クラブ活動停止処分を言い渡された。私は全部員を集め、自己管理を厳しくし、プロ経営のジム等で自主練習をすることを申し渡した。

活動再開が許されたのはリーグ戦が始まる一週間前であったが、早速大学のスポーツセンターで合宿に入り、仕上げの練習を開始した。

当時の西治部長先生やOB諸先輩に御心配を掛けたので、チームは危機感を持ってまとめ、前年と同じリーグ2位を確保できたのは何より嬉しくメンバーに感謝した。卒業時に私は体育会功労賞を受賞したが、これは苦難乗り越えたチームの全員にも与えられたものだった。

### 3. 社会人としてスタート

1967年3月、関西学院大学経済学部を卒業した私は、父の事業が写真業界に関連する貴金属リサイクルであった事もあり、将来に役立つだろうと美スズ産業株式会社という写真関係の中堅商社に就職した。

東京本社での社員研修後、大阪支社へ配属され希望していた営業職となり、大阪市内を担当した。

毎月の売上目標をクリアして進む営業の仕事は面白く、持前の馬力に加えて、自分流の営業のやり方（効率、債権回収等）を工夫するのが楽しく、成績も順調に上がっていた。

ところが、入社した翌年に事業をしていた父が体調を崩し、入院し、手術することになった。仕事一途で厳しかった父がすっかり弱気になり、見かねた母が5人の子供を集め、「息子が3人もいるのだから、1人でも会社に入って父を助けて欲しい。」と訴えた。

当時の父の事業は家族社員を含め10人程の所謂家業のレベルだった。私は小学校6年生の頃から学校の春休み、夏休み、冬休みにはアルバイトといって家業の手伝いをするのが、習慣になっていた。中学・高校の頃も同様に、従業員の運転するトラックに同乗し、荷物の運搬を手伝った。大学の頃は営業の仕事だけでなく、技術的なサポート（試験管に

よる貴金属含有試験) もやり、営業戦略立案に一役買っていた。又会社に入ってくる新人従業員に仕事の基本を教えたりもしていた。

当時は未だ会社の規模も小さく、従業員寮等は無かった。父と母の出身が鹿児島県であった為、従業員は全員郷里のツテを頼って関西に来ていたこともあり、私は中学・高校時代は従業員との相部屋だった。

朝起きると私は学校へ、彼らは仕事場へ向かう。又夜は一緒に食事し、就寝する毎日で、私は床に入り寝る前に隣にいる従業員の昔話をよく聞いていた。貧しい農村で育ち、故郷を離れて都会に出て一生懸命仕事して貰った給料から家族に仕送りをする者が殆どだった。そして彼らの流す汗と努力により、会社は段々と仕事が増えていった。この頃から貴金属のリサイクル(再利用)とリファイン(純化)という業種は時代の波に乗り、右肩上がりであった。会社が発展し結果として私達5人の子供は全員が大学迄進学する恵まれた教育環境であった。

兄弟の中でただ一人、従業員と相部屋で生活を共にした私は彼らの汗のおかげだと心の中に浸透するものがあった。

父の為に会社を手伝って欲しいという母の願いは、従業員の人達の願いでもあることが私にはわかっていた。兄達が受けないなら、自分がやらねばとの使命感で引き受けたが、受ける以上は従業員を路頭に迷わすことはできない。彼等と家族を幸せにする会社にしよう。即ち業界ナンバーワンを目指そうと決意した。

それから35年間、関学ボクシング部で身に付けたものを全て出し切ったのチャレンジだった。リングに上がる瞬間の『決断力』、真剣勝負で戦う『集中力』、より上を目指して日々努力する『向上心』。振り返るとあの厳しい練習と試合で培った体力と精神力が仕事をやるエネルギーとなり、猛烈に働いた会社生活だった。

1991年社長に就任し、全社ビジョン委員会を作り「経営理念」を改めて整備し、株式上場を目標として設定した。そして1999年10月株式店頭公開、2002年3月東京証券取引所第一部に指定され、これで私の使命は果たせたと考えて、2003年6月の株主総会で取締役退任の挨拶をして顧問となり、次のステージに踏み出した。

## 5. 入社から35年間の軌跡

(単位：百万円)

年	社員数	売上	営業利益
1968年	10人	96	2.6
1978年	86人	1,834	198
1988年	296人	6,123	463
	※1991年、第3代社長就任 株式上場の目標設定		
1998年	582人	22,142	3,250
	※1999年、株式店頭公開		
2002年	762人	34,647	4,135

	※ 2002 年、東証一部上場 ※ 2003 年 6 月、株主総会で退任	
--	---	--



2016 年	2,000 人	118,000	5,031
	※アサヒホールディングス株式会社（証券コード：5857）（※ 2016 年のみ純利益） ※グループ連結の業績		

## 6. NEXT STAGE は MASTERY FOR SERVICE !

日本の少子高齢化とグローバル化への社会貢献を目標に定めて、2006 年 兵庫県西宮市で福祉事業を開始し、ベトナム国ナムディン省では日本語学校を開設し、現在に至っている。



(写真提供『関学スポーツ』)



(写真提供『関学スポーツ』)